

## 南のひと 40

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



竹富島出身の<sup>まえもとりのうち</sup>前本隆一さんは、歩く島辞典のような人。島の葉草について聞きに行けば、「これを貸してあげるよ」と、長い年月をかけて調べあげてきた葉草の手作り資料冊子を手渡してくれる。世界中から集まってくる言語学者たちは、竹富島の言葉「テドゥムニ」を習いに隆一さんを訪ねる。お祭りでは昔から伝え継がれてきたお話を披露し、音程をつかむのが非常に難しい古謡やユンタなどの島の唄を難なく唄いこなす。島の伝統的な穀物にも詳しく、若い世代へとその知識と知恵を伝授している。

島の役員になった私の夫が、お祭りなどで来客をお迎えする際には、親の代わりのように挨拶を行い、見守り、助言をしてくれる。

隆一さんは、真面目な顔をしてお茶目な冗談を言っては場を和ませたり、厳しい口調で注意を促し場に緊張感を与えたりする。

そんな隆一さんの家を訪ねると、いつも何かしらの調べ物をしていたり、来客の相手をしていたり、常に「今」を現役で生きている。

「好きなことをして生きる」とか、「得意なことを活かした生き方」などが称賛される昨今、隆一さんを見ると、「生涯現役で自分を生きる」というのは、こういうことなのかな、と思う。

隆一さんの暮らしの中には、生涯をかけて手繰り寄せてきた島の記憶が詰まっている。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 41

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



石垣島出身の高校3年生、久手堅美海<sup>くでけんよしみ</sup>さんと出会ったのは、昨年の10月末に衆議院議員選挙が行われた時期だった。選挙に行った若い人に何かプレゼントをするというムーブメントに乗って、「選挙へ行き投票した18歳、19歳の人へ撮影のプレゼントをします」とSNSで呼びかけてみた。

美海さんが、SNSのストーリーに「選挙へ行こう！」という言葉と共にオヤケアカハチ像の勇ましい姿の写真をあげていたのが印象的で、彼女へ撮影をプレゼントすることにした。(オヤケアカハチは、かつて年貢の取り立てに苦しむ島民の先頭に立って、琉球王府へと立ち向かった人物だ)

美海さんに、初めての選挙はどうだったかと聞いてみた。

「当日選挙へ行けない子は期日前投票をしたり、選挙当日は終わった後にお互い気さくに選挙について話したりしました。前日はドキドキして緊張しながら政党名や出馬者の名前を覚え、今回は裁判官のことも調べました。調べても分からないことは、お父さんに聞きました。実際に選挙会場に行ってみると淡々とした流れ作業だったので、こんなもんなのだと思いました。以前は、政治に興味がなかったけれど、今回自分で色々調べたことがきっかけで見方が変わりました」

美海さんや彼女の周りは、選挙に行くことが当たり前で、「ご飯何食べた？」と同じ感覚で政治について話し合っていた。そのオープンでまっすぐな眼差しは今、社会へと向けられている。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 42

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



みねもとまりん  
嶺本真凜さんは、竹富島出身のお母さんむつみ睦美さん  
に連れられて昨年の3月末に沖縄島から竹富島へと  
移り住んだ。

「竹富島で暮らすことで、自分たちのルーツを少し  
でも真凜が感じてくれたら良いなという想いがあり  
ました」と睦美さん。

面白いことが好きで、ノリが良く、場を盛り上げ  
るのが上手な真凜さん。放課後や週末には学校の友  
達と楽しそうに遊んでいる姿を見かける。

沖縄に住んでいた時は、海はゴミが多くきれいでは  
なかったことから、川遊びを楽しんでいた。竹富  
島に来て、海がきれいだと思ったそうだ。

真凜さんにはかつて力士だったしんこう真功さんという今  
は亡きお爺さんがいる。

「おじいちゃんには、竹富島の昔の話を聞きたか  
った。お姉ちゃんとお兄ちゃんには厳しかったけど、  
私には優しくかったから、おじいちゃんは、優しくて  
厳しい人」

真凜さんに、これからチャレンジしてみたいこと  
について聞いてみた。

「お母さんと5歳の時に種子取祭の舞台を観て、面  
白かった。私も舞台に立ってみたい。怖いけど、楽  
しそう」

同じ沖縄でも島が違えば暮らしも人も変わる。真  
凜さんはこれからどんな人になっていくのだろう。  
楽しみに見守っていきたい。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996  
年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。  
現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 43

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島出身の狩俣正三郎<sup>かりまたせいざぶろう</sup>さんは、その人間味溢れる人柄から島民に一目置かれる存在だ。

正三郎さんは、農業の傍ら竹富町議会議員を務め、竹富公民館長を兼務した。また、観光業に頼らない養蚕業を再開するべく養蚕組合を組織し、その後、竹富町農業協同組合の組合長などを務めながら保護司となり、八重山保護司会会長を務めた。

これらの人生の歩みを見るだけでも、正三郎さんは、島民にとって頼れる存在であり、威厳のある人物であることが見てとれる。ひよんな事から島人と昔話をすれば、正三郎さんの名前と共に、その時々苦勞話と武勇伝が語られ、「あの時は助かった」とか「あの人ののおかげだね」というような言葉をよく耳にする。

同じ集落に暮らしていた事もあり、小さかった娘の手をひいて正三郎さんの家の前を通れば、「シュブイ(冬瓜)を持っていきなさい。ほうれん草が採れたからもらっていきなさい」と声をかけてくれた。正三郎さんとハツさん夫妻の家は、庭も家庭菜園も、ため息がでるほど綺麗に整えられていて、いつ訪れても清らかな気を肌で感じた。

今では集落の集まりには参加されなくなった正三郎さんだが、アイジシン(上布で仕立てた着物)に身を包み、ただ座って居るだけなのに、その場の空気が引き締まるような、そんな存在感を放つ。

正三郎さんの息子<sup>けいいち</sup>さんで大学名誉教授の恵一さんに、恵一さんから見た正三郎さんはどんな人ですかと聞いてみた。

「私が中学生の頃、学校から帰って畑に行かず勉強をしたら、その夜『勉強は学校でするもんだ』と叱られたことがある。勉強せよと言われたことは一度もなかった。その後の父の言動からも、社会人としての人間力を育むことを重視する人であると思っている」

社会と常に向き合い、どうすればより良い島になるのか問い続けてきた正三郎さん。その生きざまから見えてくる人間像は、「嘘」が蔓延するこの時代だからこそ、今を生きる全ての世代に胸を張って生きることへの希望と勇気を与えてくれる。

水野暁子 みずのあきこ  
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 44

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。

竹富島出身の新田初子<sup>にったはつこ</sup>さんは、島の祭りを司る神  
司を務めながら新田荘を営んでいる。

1970年ごろ、民泊のような形で島を訪れる人を自  
宅に宿泊させたのが始まりだった。その後、本土復  
帰後の1973年ごろから本格的に民宿新田荘を名乗  
り、多くの観光客や学生が宿泊するようになった。

当時は、石垣と竹富を結ぶ船も本数が少なく、島  
内には食堂も一軒しか無かったことから、お客さん  
を海へと魚や貝を捕りに連れ出したり、お腹を空か  
せた若い学生の宿泊客には、ソーメンチャンプルー  
やおむすびなどを振る舞ったこともあったそうだ。  
そんな時代の世話の焼けた宿泊客のことは密な時間  
を共にしたことだから、今でもよく覚えているという。

初子さんは、集いの場や祭りなどでひとときわ目立  
つ通りの良い声でうたう。お腹の底から誇らしげに  
堂々とうたう姿が印象的だ。

民泊を始めた頃から約10年に渡り、近くに暮らし  
ていた喜宝院の院長で住職だった上勢頭<sup>うえせとう</sup> 亨<sup>とある</sup>さんか  
ら、たくさんの「島のうた」を伝授された。島のう  
たの歌詞だけでなく、その背景に広がる歴史につ  
いて知ることは、当時の初子さんにとってはとても刺  
激的で興味深いものだった。亨さんとは、食事を一  
緒にしたりお話しをしたりと、日々の暮らしの中で  
交流があったからこそ自然な流れでうたを習うこと  
ができた。

初子さんに、「ご自身の家族や、これからの時代を  
生きる子どもたちへ伝えたいことはありますか？」  
と聞いてみた。

「子どもは親の背中を見て育つと言うでしょ。特に言  
葉にして何かを伝えるということはやっていない。  
ただ、日常の中で神様に願い、日々の暮らしをしっ  
かりとしている」

スマートフォン1つあれば、だいたいの事が成し  
遂げられるこの時代にも、同じ空間を共有し、お互  
いの体温や息づかいまでもを感じる過ごし方をしな  
くは伝わらないこともある。初子さんと話してい  
るとそんなことを強く感じる。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996  
年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。  
現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 45

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



おおはま れん  
大濱 廉さんは石垣島出身、現在社会人1年生である。廉さんのことはこれまでに2回撮影している。1回目の撮影は、2021年の夏の終わりごろ、廉さんが高校3年生の時だった。「南のひと・Transition」というシリーズで社会に出る前の学生を追って撮影している時に会った。奇抜な装いに身を包み待ち合わせ場所に現われた廉さんは、自分を表現する方法の1つであるファッションが好きなのだ、どこかあどけなさが残る口調で話してくれた。

昨年行われた参議院議員選挙の時に、選挙に行つて投票した18歳、19歳の人へ撮影のプレゼントをSNSで呼び掛けた。その時に「投票してきました」と1番最初にメッセージをくれたのが廉さんだった。撮影日の都合が合ったのは、参議院選挙が終わり、3ヶ月以上経った石垣市長選が終わってからとなった。

撮影はユーグレナモールで行った。廉さんが小さい頃、親戚がお店を営んでいたことからよくここで時間を過ごしていたそうだ。廉さんはこだわりのシャツとヘアスタイルで現れた。

高校を卒業した廉さんは、介護福祉の仕事についていた。商店街を歩きながら、新しい生活について尋ねると、「責任感に押しつぶされそうです」と俯き加減に呟いた。以前会った時より横顔が大人びて見え、あどけなさは消えているようだった。

撮影後、選挙に行つて投票した時のことを聞いた。「石垣市長選挙の時の方がずっと身近に感じて、もっと調べた」と話してくれた。廉さんは、話す時の声のトーンが静かで優しく、言葉使いが丁寧だ。その口調からは彼の育ってきた環境がにじみ出ているように感じた。

学生から社会人へと踏み出していく最初の一步のこの時期に撮影できたこと、今だから感じている葛藤やあがきを隠さず見せてくれたことへ感謝したい。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 46

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



石垣島白保出身で八重山上布の沖縄県指定無形文化財技能保持者である松竹喜生子<sup>まつたけきみこ</sup>さんは、中学生の頃から絵やイラストを描くこと、物作りをすることが何よりも好きだった。

兄の勧めで当時難関校と言われていた沖縄工業高校のデザイン科に進み、卒業後は京都で服の図案画を描く工房へ就職、そこで先生から花の絵をスケッチブックに描き続けるというトレーニングを受けた。数年後、京都の気候が肌に合わなかったことから、沖縄へ戻りたいと思うようになり、図案家として採用されたのが首里の紅型工房だった。面接の時に役に立ったのが京都の先生の元で描き続けていた花の絵のスケッチブックだったという。

沖縄島では、八重山上布の展示会などに足を運び、自分の故郷である八重山が生み出す作品に興味を抱くようになる。お盆休みで八重山に帰島していた際に石垣市が主催していた織物講習に申し込み、その後受講する運びとなった。それから現在に至るまで、講習で培った「八重山上布」の技術を元に自然の素材を用いながら作品を生み出し続けている。

喜生子さんは、仕事を難儀だと思ったことがないという。好きなことだから、いつもそのことを考えていて、まさに趣味が仕事、仕事は趣味なのだと言いつつ話す。

喜生子さんの生き方は、常に自分の好きに率直で、その好きが喜生子さんを突き動かしている。自分に何ができるかを想像してみると自然とやるべきことが見えてくる。自分の好きがはっきりしていて、自分を信頼しているからこそ恐れることなく進むべき道をまっすぐにつき進んで行けるのだろう。

「できる自分を見てみたい。できる物を見てみたい」と話す喜生子さんは、楽しげで明るいエネルギーに満ち溢れていた。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 47

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



小浜島細崎出身の伊良部美美さんとの出会いは、2019年のこと。友人と小浜島を訪れた際にたまたま入った食堂が細崎にある伊良部夫妻が営む食堂だった。

食堂の壁には大漁旗が飾られ、いかにも海人が営む食堂といった雰囲気だった。その日は、魚フライ定食を注文したのだが、これが今までに食べたことのあるどの魚フライ定食よりもおいしく、友人と顔を見合わせて「魚フライってこんなにおいしかったっけ?」と言いつつ。

この食堂で朗らかに接客してくれたのが伊良部美美さんだった。フレンドリーな口調と柔らかな物腰、彼女の存在は店内の雰囲気を明るくしていた。

その後、新型コロナウイルスの影響で伊良部夫妻はお店を長らく閉めていたが、再び営業を再開し、現在はもずくの加工品などを主に販売しながらお店を営んでいる。

10代の頃から付き合いがあったパートナーで海人の伊良部哲也さんは石垣島出身、4年前に美美さんの出身地である海人集落の細崎に2人で移り住んだ。夫婦ともに魚が大好きで、欠かさず毎日食べているほどだ。美美さんが都会に憧れて上京していた時も、島の魚料理が無性に恋しくなったそう。それほど暮らしの中で島の魚が身近なものとして美美さんの人生の中にずっと存在していた。

出身地である細崎に帰ってきて思ったことを聞いてみた。

「外から来た若い世代の人たちや、海人ではない集落の人たちがハーリーに率先して参加してくれたり、拜みから、お重作りまで勉強しながら色々と一緒にやってくれたりすることが本当にありがたい。そんな中で、この細崎出身者である自分が、昔から見ても来たことを今の若い人に繋いで行くことが大切なんだと思う。本来私たち海人が大切にしてきた精神は守りつつ、今の時代に合うやり方を模索しながらやっていくのがいいのかなと思います」

海からの恵みに生かされて暮らす美美さんからは、広い海のような懐の深さを感じた。

水野暁子 みずのあきこ  
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー



## 南のひと 48

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



竹富島出身の上勢頭 輝<sup>うえせど あきら</sup>さんは、東海大学の海洋学部水産学科を卒業した後、竹富島に戻り、生まれ育った島の自然環境を生かし、沖縄の伝統的な木造船サバニで竹富島の海を案内するツアーを行っている。

サバニは2017年に、輝さんがクラウドファンディングにて資金を集め、石垣島のサバニ大工に発注し造船したものである。

輝さんにコンドイ浜で会うと、一年を通しての浜から見た太陽の動きや、渡鳥の生態、海の生き物について教わり、いつも輝さんと自然との繋がりの深さに驚かされ、感心している。

輝さんに、なぜサバニだったのですか？ と聞いてみた。

「昔から帆掛けサバニに対する憧れがあったのと、中学の時にハーリー舟を借りてきて由布島まで漕いだ経験があり、そのことがきっかけになっている」

サバニを通して輝さんはどんなことを伝えたいですか？ また、どんな自分でいたいのですか？

「竹富島の良さを伝えたい。自然や文化や先代から受け継がれた知恵をサバニに乗って感じてもらいたい。島の先輩達の歴史を語り継ぎ、島の文化を誇りに思いながらできるこの活動で、家族を養い、飯を食い、そして後輩達を育てていきたい。自分は、いつまでも海原に心躍らせる男でありたい」

竹富島では沖縄が本土復帰した頃まで、サバニを漕いで西表島までお米を作りに行っていた歴史がある。かつてサバニが停泊していた竹富島の海に、今では輝さんのサバニが浮いている。

輝さんは、自分が描きたい島の未来図をサバニのある風景とともに作り出している。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 49

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



石垣島在住の鈴木邦彦<sup>すずきくにひこ</sup>さんは、ボルダリングのインストラクターで、2020年の春に東京から石垣島に移り住みボルダリング施設を運営している。鈴木さんは、八重山の気候や自然、そして岩に惹かれて石垣島に移住したという。

ボルダリングについて鈴木さんに聞いてみた。

「自然の岩でもよくボルダリングをしますが、そこには自然との真剣勝負とも言える面白みがあります。八重山は、ロケーションも含めると世界トップレベルに美しいボルダリングエリアではないでしょうか。『岩登りをする』と言うと、手が痛くないの？とよく聞かれるのですが、花崗岩や砂岩は琉球石灰岩と違い触り心地がなめらかなんです。これらの岩は、ボルダリングの対象としては絶好です」

今後は、ボルダリングを通してどんなことをしていきたいですか？

「未開発の岩をもっと登りたいです。まだ誰も登っていない岩を登ることを『初登』と言うのですが、一つの岩に一度しかチャンスがない、特別な機会なんです。石垣島や西表島には未登の岩はまだたくさんあります。そんな八重山の岩や岩登りの魅力を伝えていきたいです」

クライマーの鈴木さんを通して見る八重山は、岩が中心におかれ、その背景には、八重山の自然と長い歴史が広がっている。以前、鈴木さんのSNSの投稿に、八重山の岩を紹介しているものがあり、岩への敬意や憧れのような感覚をその投稿から感じた。鈴木さんが岩と向きあう感覚は研究者や学者のそれとは別物なのではないかと思う。

岩を登ることに情熱をかけられる鈴木さんが、いつか八重山の岩史をクライマー目線で綴ってくれる日を楽しみにしている。今まで誰にも意識されなかった岩、名もなき岩に光を当てて欲しい。そして、それはきっと自然への尊敬や畏怖の念と共に、岩愛に満ち溢れたものになると確信している。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

## 南のひと 50

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



石垣島の最北端、平久保でやちむん工房を構える堀井太朗さんは兵庫県出身で、故郷には目の前に船が行き来する明石海峡があり、その向こうに淡路島が見える。そんな光景を見続けていたことから、異国、ここではないどこかにいつも心を馳せていた。

最初についた仕事は、外国航路（地球一周）の貨物船甲板員で、海を渡り世界中の港に停泊し、たくさんさんの刺激や衝撃を受けたそうだ。貨物船甲板員の仕事を辞めた後は、バイクで日本を一周した。その時に会った沖縄の景色が太朗さんの心に深く染み入り、記憶に残ったという。その後もアジア、中近東、ヨーロッパ、北西アフリカ、北アメリカと世界中を旅してまわった太朗さん。4度目のインド旅でパートナーと出会い結婚、大阪で長女の紗らさんが誕生した。

やちむんとの出会いは、沖縄県読谷村の北窯に弟子入りしたときだった。紗らさんが誕生した頃から、ずっと記憶に残っていた沖縄へ移住したいと思っていたことがきっかけだった。北窯で修行した後、石垣島へと移住し、南島焼で轆轤の技術を修練。2000年に「太朗窯」を立ち上げ独立、2001年に長男の草太さんが誕生した。

「若い頃は、ここではないどこかへの憧れから旅をしていた、現実逃避だったところもある。あの頃の旅は、根なし草があっちへ、こっちへと漂う感じだった。それが絶対的に変わった理由が、長女紗らの誕生だった。そして島に自分たちの土地を買い家を建てたこと。今では旅に出るといい感じの自由さを感じるし、帰る拠点があるという安心感もある」と話す太朗さん。

太朗さんは言うてみれば、留まることなく広い海を浮遊している舟のよう。今は停泊するときも航海に出るときも安定させてくれる家族や家というアンカーが存在している。

「またインドを旅したいし、他の国々にも行きたい」と話す太朗さんは、その後も紗らさんや草太さんのことをたくさん語ってくれた。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー